

「すこしおしやれをして礼拝へ」

(マタイによる福音書22:1-14)

先々週、先週に続き、今週も主イエスは、祭司長や長老たちに向けたとえを語ります。最初の「二人の息子」のたとえでは「洗礼者ヨハネ」が登場し、続く「ぶどう園と農夫」のたとえでは、隅の親石となった「主イエス」が登場しました。これらに続く今日の福音、第三のたとえでは主イエスの復活と再臨の間を生きる「教会」の姿が描かれます。

主イエスが救いを完成するために再臨する日がやってきます。その日は、最後の審判の「怖い」日のようにイメージしがちですが、いよいよわたしたちが主イエスと顔と顔を合わせることができる、喜びに溢れた日です。だからこそ今日のたとえで、その日は「王子の婚宴」として描かれます。王なる神が心を尽くして用意してくださる宴の日こそ、再臨の日なのです。

王は準備に準備を重ね、予め招待していた人々を家来たちに呼ばせませす。しかし、人々は来ようとしませんでした。それでも、もう一度主人は迎えに行かせませす。けれども人々はそれを無視し、それぞれの仕事にでかけます。それどころか、その家来たちを捕まえて、殺してしまう者までいました。この「招いておいた人々」とは、祭司長や長老たちを指します。彼らは、神のもたらす救い=婚宴に価値を見いださず、目先のことにばかり、身も心も注いでいます。殺されてしまった家来たちとは、神の招きに背いてきたこの人々によって殺された、預言者たちだと読むことができます。しかし、この人々は結局王の怒りに触れ、滅ぼされることとなります。つまり、祭司長や長老たち、宗教的指導者たちは救いへの優先権を奪われることになってしまうのです。

婚宴の用意はすっかり整っています。しかし、予め招待していた客はそれにふさわしくありませんでした。王は三度目には、招待した客ではなく、道で出会うすべての人を招くように命じます。そして、「善人も悪人も」すべての人が集まり、婚宴は客でいっぱいになりました。花婿である王子の登場を待っている人々の姿は、死んで復活した主イエスが再び来るのを待つ「教会」の姿を表しています。主人はすべての人を招き、教会に迎えます。ただし、そこから追い出されてしまうことになる人がいます。それは「礼服を着ていない者」です。教会から「悪人」は排除されませんが、「婚礼の礼服」を着ていない者は外の闇へと投げ出されてしまうのです。

王子の婚宴は、王が手によりをかけて振る舞う宴です。残念ながら最初の招待客たちは、その宴の素晴らしさと、そこに招かれていることの栄誉を見落としてしまいました。しかし、道で声をかけられ集まって来た人々は、王の食事が最高のものであることに気づくことができました。「礼服を着ていない者」も、食事の良さには気づいた一人です。けれども彼はその食事が、誰が招いた婚宴であるかを把握していませんでした。誰が招いた宴かをわきまえていたなら、王への敬意を表し、「婚礼の礼服」を身に着けたはずだからです。つまり、神が期待することは、ただ

食事の席に参加することだけではなく、招いてくださった方を知って、宴席に連なることなのです。主なる神が準備を重ね、迎えてくださる宴です。食卓を整え、招いてくださる神の恵みに感謝し、その感謝の思いをもって婚宴に出席するなら、「礼服」をまとしてその場に向かうはずですが。それゆえ「礼服」とは、救いに招かれていることへの感謝だということができます。日々、神の恵みを感じ、その恵みをいたくなかで、感謝とともに生きることこそ、ふさわしい礼服をまとうことなのです。

このたとえ話を読んでいて、思い出したものがあります。それは、『おいで子どもたち 初めて陪餐する子どもたちへ』の一節です。

「おいで子どもたち 今日あなたはあなたが はじめて教会で パンとぶどう酒をいただく日

顔をあらって 歯をみがいて すこしおしゃれをして おいで子どもたち 小鳥たちといっしょに 日の光の中を」

(『おいで子どもたち 初めて陪餐する子どもたちへ』文 斎藤惇夫、写真 田中雅之、日本聖公会、5～6ページ)

「すこしおしゃれをして」という箇所が、今日の福音を自然と表しているように思います。今日はあらためて、今、礼拝に招かれている自らの姿を省みましょう。贅沢でお金をかけた服装をすることではありません。そうではなく、神さまから招かれ、日々生かされていることの感謝する者として、この礼拝にあずかりましょう。その神さまへの感謝の気持ちを「すこしのおしゃれ」に込めて礼拝に参加しましょう。華美でなくとも、その心は自然とその姿に表れ、神さまに伝わることでしょう。